

2023年6月4日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「わたしと笑い（イサク）」

聖書：創世記21：1～8

サラは「神はわたしに笑いをお与えになった。」という。「笑い」には主に2つある。思いがけない出来事を通して与えられる嬉しい笑い。もう一つは、相手の馬鹿げた発言、行動に対する嘲笑する意味での笑いである。この2つの笑いには、大きな違いがあるが、サラはその二つの「笑い」を経験する。

先ず今日の箇所では、アブラハムとサラとの間にやっと子を授かったことが記されている。どれほど嬉しいことであったか。家父長制の社会にあって、子を宿さずにこの群れにすることがどれだけ肩身が狭く、辛い状況に晒（さら）されていたか。「サラは言った。「神はわたしに笑いをお与えになった。」」とあるが、サラはこれまで本当の意味での「笑い」は、無かったのかも知れない。「イサク」とは、ヘブライ語で「イツハーク」といい、「笑う」という意味が含まれる。

神がサラに約束をした一年前、サラはもう一つの「笑い」をしていたのである（創世記18：10以下）。すなわち、神をあざ笑っていたのだ。不妊の女である自分に男の子が生まれるという約束を耳にした時、サラは「笑った」のであった。サラは神様の約束を信じることができなかつたがゆえに、その約束を笑ってしまう。人間は弱さゆえに、神を信じきれない弱さゆえに、神の約束を、いや、神の存在自体をもあざ笑う者である。

この神を「あざ笑う」とは、人間の現実の社会の中でしか生きられない状況が言い表されている。人間が現実の社会の中だけで生きている者であれば、仕方のないこと。しかし、そういう現実の社会のみだけを見、そこだけで生きることは、神からの希望、喜び、笑い（イサク）は訪れない。人間の側だけしか知らない人には、神の約束は“笑い事”でしかない。

しかし信仰とは、人間の側に立ちながらも、神の側に望みを置いて生きることである。そして、そのことのゆえに人間の側にありながら、神の側に生かされることである。

サラが言う「神はわたしに笑いをお与えになった」という恵みは、今の私たちにも、神様がくださる恵みである。どのような形での「笑い」かは分からないが、私たちにもきっと豊かな「笑い（イサク）」が、神様から与えられるものである。現実の厳しい社会に生きながらも、神の側に希望を置きたい。（神谷）